

井の頭ランニングコース

二十四期生 山岡 雅博

西高卓球部時代、私にとって万感の込み上げる三年間で、その前に、当時の部誌がないので、自己中心的で曖昧な所があると思いますが御容赦下さい。

部員は全部で三、四十名程で、常に練習に出ていたキチガイ的なのが二十名近くいたと思います。その上、四・五月等は新入生があふれて、五台の卓球台ではさばき切れず、新入生は外でトレーニング、そして、シゴキの専門家みたいな先輩がいて、下級生から「オニ」といわれて慕われておられた様です。そんな訳で、能率の良い練習方法を皆でよく話し合いました。それで、台を有効に使うために練習日（週に三〜四日で、その日も下校時間厳守なので、遅くなつては松崎さんにどなられたものでした）以外の日にトレーニングを重点的にやるうという事で、トレーニングだけの日を決めたり、自主トレを呼びかけたりしました。結局、ランニングだけは、ほぼ毎日、井の頭公園まで行っていた様です。その事で記憶に生々しいのは、日頃汗かきのK君が冬のトレーニングは寒いというので、タイツの下にモモシキを着用してのランニング、さすが冬でも汗は良く出る。その後の更衣室で「K

よ、イン○ンには気をつけよ」とは誰の弁であったか定かではありません。話は変わりますが、井の頭までのランニングとは良く考えたもので、ちょうど、あごが上がり、バテてくのが立教の女子高前あたり、すると不思議なもので、ウソのように目はらんらん、足は力強く甦る、あのコースを初めて走った先輩の深い御造詣には今更、頭が下がる思いであります。

クラブのあり方についても話した様です。確か、小林君が「アマチュアスポーツは、勝たねば意味がない」と力説し、私は「勝負以前に、魂の燃焼にある」と自己満足的な考えを持っていました。二人の差は卓球に表われ、彼は球を入れる事に専念し、私は、球をひっぱたく事に夢中になったのです。つまり玉砕型の私は彼には歯が立たなかったというわけです。部長の決断力のなさが結果的に話し合いを増し、民主的なクラブの運営ができた様に思います。それにつけても、感心すべきことは、練習中だけは、不思議な程に、皆、引き締まっていた事です。その上、誰に言われる事なしに、自主トレをしていたのです。卓球が三度の飯より好きな連中だったからできた、といえればそれまでですが、今「小人、閑居して不善をなす」の諺どおり、大学生というより大衆生として無秩序の中に浸りきっている我が身を思うにつけ、西高卓球部という自由な雰囲気の中で、各人自らを鍛えた、つまり自由を律し得たという事が懐しくてならないのであります。